

看護学生の自尊感情と職業的アイデンティティとの関連から考える教育的支援

合田 友美¹, 黒田 裕子², 小藪 智子², 新見 明子²

Educational Supports in Terms of Relationship between Self-Esteem and Vocational Identity of Student Nurses

Tomomi GODA¹, Yuko KURODA², Tomoko KOYABU² and Akiko NIIMI²

キーワード：看護学生，自尊感情，職業的アイデンティティ，支援

概 要

看護職の職業的アイデンティティは看護実践の基盤となるものであり、看護学生の職業的アイデンティティ形成を促す支援は重要である。本研究では、看護学生の特性自尊感情および職業的アイデンティティを測定し、この両者の関連と経年的な変化を明らかにすることによって、自尊感情に着目した支援について検討した。その結果、看護学生の自尊感情と職業的アイデンティティにはやや弱い正の相関を認め、職業的アイデンティティ得点は先行研究と同様、経年的に有意に低下していた。一方、自尊感情は卒業時に有意に高くなっており、これは臨地実習で能動的態度を求められたり自分の価値観や思考の特性を見つめながら他者を理解する経験をしったりすることが影響していると考えられた。その結果、繰り返し他者と自己、看護と自己との比較を促し承認を与えながら看護学生が自分の価値を感じられるような教育的支援が必要であることが示唆された。

1. 緒 言

近年、少子化が進み一人の子どもにかかる期待が高まる傾向にある。このようななか、仲野ら¹⁾は、大学生が親からの期待を肯定的に受容するとアイデンティティ形成が促進されることを報告しており、春日ら²⁾は親がもつ人間性期待が大学生の自尊感情へ正の影響を与えると指摘している。しかし、近年、教育制度の変革や社会経済の影響を受けて看護師養成校への進学希望者が増加の一途を辿るなか、周囲の期待を感じながらも「看護職は自分の仕事」という感覚を見出せず、職業的アイデンティティの揺らぎや低下をきたしたまま看護師としての進路を決定していく看護学生がおり³⁻⁵⁾、さらに上山⁶⁾は、約1割の学生が看護職を肯定的に捉えられずに修了段階を迎えていると報告している。このように、看護学生の職業的アイデンティティ

の形成が不十分であることは多く指摘されているものの、介入方法に関する研究成果は少ない現状がある。

看護職の職業的アイデンティティは、看護実践の基盤となるものであり、看護を実践するためには看護学生は知識や技術といった外的変化だけでなく、職業的アイデンティティの形成という内的変化が必要である。

このアイデンティティの形成を進めるためには、多様な視点に気づかせてくれる他者の存在と、他者の視点に呑み込まれずに自分と異なる視点を生かす自己の存在が必要であることが指摘⁷⁾されており、言い換えれば、他者と自己との相互関係を構築することによる社会的関係性の獲得が不可欠であるといえる。このことから、職業的アイデンティティと社会的関係性の一側面である自尊感情との間には関係があるのではないかと推察できる。しかし、これまで職業的アイデンティティはアイデンティティの一部として取り扱われており、看護学生の自尊感情と職業的アイデンティティとの関係を明らかにした研究は、筆者らが知る限り見当たらない。また、看護学生の自尊感情の経年的変化を捉えて教育方法を検討しているものは、ほとんどない。

(平成23年10月19日受理)

¹香川県立保健医療大学 看護学科

²川崎医療短期大学 看護科

¹Department of Nursing, Kagawa Prefectural College of Health Sciences

²Department of Nursing, Kawasaki College of Allied Health Professions

そこで本研究では、看護学生の特性自尊感情（以下、自尊感情）と職業的アイデンティティの関係の経年的変化を明らかにしたうえで、自尊感情と職業的アイデンティティの関係を明らかにする。そして、看護学生の個人特性の一つとしての自尊感情に着目した職業的アイデンティティ形成を促す支援について示唆を得たので報告する。

2. 本研究の概念枠組みと用語の定義

1) 概念枠組み

Josseruson (1992) の「アイデンティティ発達の関係的側面」をもとにアイデンティティと職業的アイデンティティの形成について概念枠組みを作成し、図1に示した。

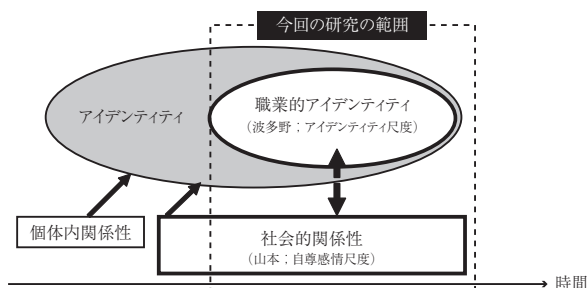


図1 概念枠組み

2) 用語の定義

本研究では、文献を引用して以下のように用語を定義する。

アイデンティティ：「自分であること」「真の自分」などの意味をもち、他者の中で独自の存在であることを認めると同時に、過去から現在、未来に至る時間の流れの中で一貫した自分らしさを維持できている状態⁸⁾

職業的アイデンティティ：職業との自己一体意識⁹⁾

自尊感情：自己に対する評価感情で、自分自身を基本的に価値あるものとする感覚¹⁰⁾

3. 研究方法

1) 調査方法

A短期大学看護科2007年度入学生113名を対象に入学時（2007年8月）と卒業時（2010年3月）の計2回、無記名の質問紙調査を実施した。質問紙は性別、自尊感情尺度、職業的アイデンティティ尺度で構成した。自尊感情尺度はRosenberg¹¹⁾の自尊感情尺度を翻訳した山本ら¹²⁾の自尊感情尺度10項目を用い、解答形式は「あてはまる = 5」から「あてはまらない = 1」の5

件法とし合計点を尺度得点とした。また、職業的アイデンティティ尺度は波多野ら³⁾が開発した4『カテゴリー』12項目からなる尺度を用い「非常にそう思う = 5」から「絶対にそう思わない = 1」の5件法で回答を求め得点配置をした。

2) 分析方法

入学時と卒業時の2回の調査を継続できた学生で欠損値のある者を除いて分析対象とした。尺度ごとにCronbachの α 係数を算出し内の一貫性を確認したうえで、Wilcoxonの符号付き順位検定を用いて自尊感情および職業的アイデンティティの入学時と卒業時の2時期の差をみた。そして、Spearmanの順位相関係数を算出し、自尊感情と職業的アイデンティティの関係をみた。分析にはSPSS (Ver. 19.0)を使用した。

3) 倫理的配慮

調査対象者に、研究目的と方法について文書と口頭で説明をおこなった。そして、データはIDを付与して統計的に処理し、プライバシーは保持されること、研究以外の目的では使用しないこと、調査への協力は自由意志によるもので成績に関係しないことを説明し、署名をもって同意を得た。

4. 結果

1) 属性

入学時と卒業時の2回継続して調査できた者は76名（回収率67.3%）で、そのうち欠損値のある者を除く有効回答を65名から得た（有効回答率85.5%）。性別の内訳は男性3名（4.6%）、女性62名（95.4%）であった。

2) 内の一貫性の検証

自尊感情尺度10項目の信頼性係数は、入学時 $\alpha = .82$ 、卒業時 $\alpha = .84$ と高値を示した。また、職業的アイデンティティ尺度12項目では入学時 $\alpha = .91$ 、卒業時 $\alpha = .93$ で内の一貫性が認められた。

3) 入学時と卒業時の自尊感情得点の比較（図2）

自尊感情得点の平均値（ \pm 標準偏差）は、入学時28.94（ ± 5.684 ）、卒業時33.88（ ± 5.293 ）と卒業時に有意に上昇していた（ $p < .01$ ）。さらに、入学時と卒業時の自尊感情得点の相関をみた結果、有意なやや強い正の相関を認めた（ $r = .500, p = .000$ ）。

4) 入学時と卒業時の職業的アイデンティティ得点の比較（図3、4）

職業的アイデンティティ尺度の12項目の平均値（ \pm 標準偏差）は図3に示す通りである。入学時および卒

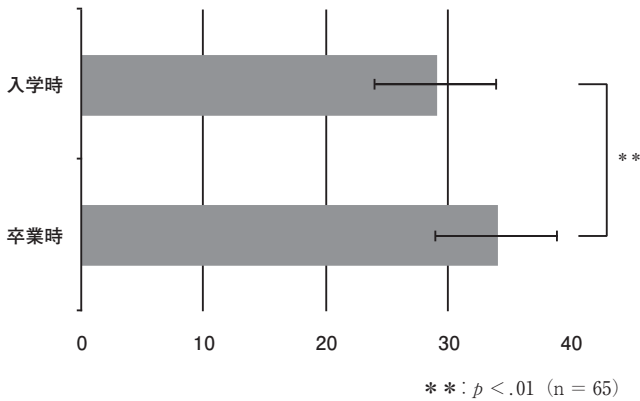


図2 入学時と卒業時の自尊感情得点の比較

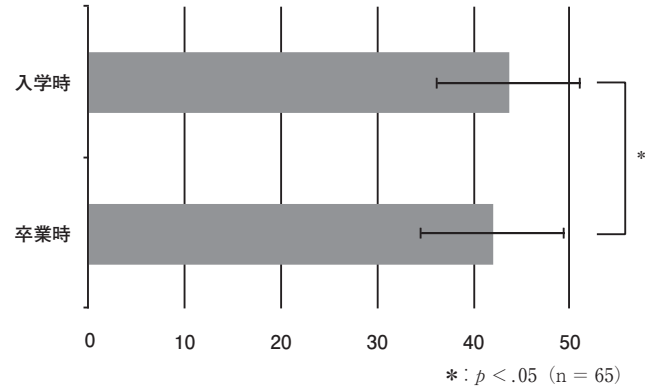


図4 入学時と卒業時の職業的アイデンティティの合計得点の比較

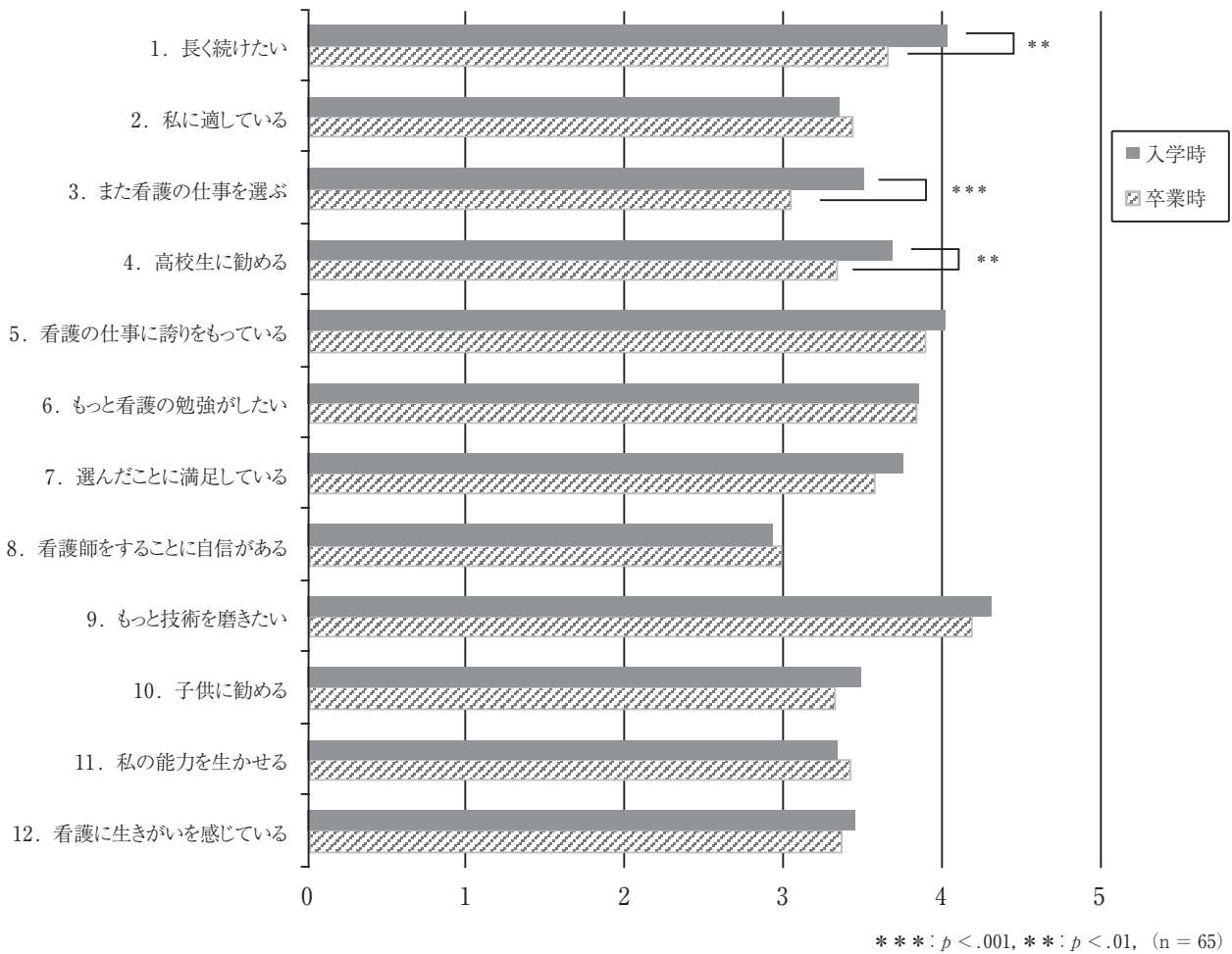


図3 入学時と卒業時における職業的アイデンティティ下位項目の平均値の比較

業時において最も得点が高い項目は「もっと看護の技術を磨きたい」であった。

合計得点の平均値(±標準偏差)は、入学時43.71(±7.359)、卒業時42.05(±7.532)で卒業時に有意に低下していた($p < .05$)。そこで、下位項目をみる

と8項目が卒業時に低下しており、このうち「将来看護師の仕事を長く続けたい($p = .003$)」「もう一度選ぶとしたらまた看護の仕事を選ぶ($p = .000$)」「高校生に‘看護師になりたいが’と相談されたら勧める($p = .006$)」は有意差を認めた。

一方、有意な差はないものの「看護の仕事は、私に適している」「看護師として仕事することに自信がある」「看護の仕事は私の能力をいかせる」の3項目は卒業時の平均点が上昇していた。

5) 自尊感情と職業的アイデンティティの関連

(1) 入学時における自尊感情と職業的アイデンティティの関連 (表1)

入学時の自尊感情得点と職業的アイデンティティの合計得点では、有意な弱い正の相関があった ($r = .352, p = .004$)。自尊感情得点と職業的アイデンティティ4カテゴリーの $r = .189 \sim .393$ で、『職業的自己関与』『職業人としての自尊感情』『職業人としての自己向上』の3カテゴリーで弱い有意な正の相関を認めた ($p < .05$)。そして、入学時の自尊感情得点と職業的アイデンティティの下位項目の相関をみると、「看護師の仕事は私に適している ($r = .493, p = .000$)」「看護の道を選んだことに満足している ($r = .373, p = .002$)」「看護師として仕事することに自信がある ($r = .306, p = .013$)」「看護の仕事は私の能力を活かせる ($r = .488, p = .000$)」の4項目で有意差を認めた。

(2) 卒業時における自尊感情と職業的アイデンティティの関連 (表2)

卒業時の自尊感情得点と職業的アイデンティティの合計得点では、有意なやや強い正の相関があった ($r = .405, p = .001$)。自尊感情得点と職業的アイデンティティの4カテゴリーの $r = .241 \sim .446$ で『職業的自己関与』『職業人としての自尊感情』『職業への肯定的イメージ』の3カテゴリーで有意差を認めた ($p < .05$)。さらに、卒業時の自尊感情得点と職業的アイデンティティの下位項目では、「将来看護師の仕事長く続けたい」「もっと看護の技術を磨きたい」を除く10項目で有意な弱い正の相関を認めた ($r = .276 \sim .398, p < .05$)。

(3) 入学時の自尊感情と卒業時の職業的アイデンティティの関連 (表3)

入学時の自尊感情得点と職業的アイデンティティの合計得点では、有意な弱い正の相関があった ($r = .247, p = .047$)。また、自尊感情得点と職業的アイデンティティのカテゴリーの相関をみると『職業的自己関与』『職業人としての自尊感情』の2カテゴリーにおいて有意な弱い正の相関を認めた ($p < .05$)。さらに、入学時の自尊感情と卒業時の職業的アイデンティティの下位項目では、「看護師の仕事は私に適している ($r = .254, p = .041$)」「看護の道を選んだことに満足している ($r = .367, p = .003$)」「看護師として仕事を

表1 入学時における自尊感情得点と職業的アイデンティティの相関

		入学時自尊感情得点
入学時 職業的 アイデンティ ティ	1. 将来看護師の仕事長く続けたい	-.020
	2. 看護師の仕事は私に適している	.493 **
	3. もう一度職業を選ぶとしたらまた看護の仕事を選ぶ	.208
	4. 高校生に「看護師になりたいが」と相談されたら勧める	.158
	下 5. 看護の仕事に誇りをもっている	.219
	位 6. もっと看護の勉強がしたい	.218
	項 7. 看護の道を選んだことに満足している	.373 **
	目 8. 看護師として仕事することに自信がある	.306 *
	9. もっと看護の技術を磨きたい	.235
	10. 私の子供が看護師になりたいといったら勧める	.159
	11. 看護の仕事は私の能力を生かせる	.488 **
	12. 看護に生きがいを感じている	.220
カ	職業的自己関与 (下位項目1.2.3.7.11.12)	.393 **
テ	職業への肯定的イメージ (下位項目4.10)	.189
ゴ	職業人としての自尊感情 (下位項目5.8)	.348 **
リ	職業人としての自己向上 (下位項目6.9)	.268 *
計	合 計	.352 **

*: $p < .05$ **: $p < .01$ (n = 65)

表2 卒業時における自尊感情得点と職業的アイデンティティの相関

		卒業時自尊感情得点
卒業時 職業的 アイデンティティ	1. 将来看護師の仕事を長く続けたい	.233
	2. 看護師の仕事は私に適している	.398 **
	3. もう一度職業を選ぶとしたらまた看護の仕事を選ぶ	.354 **
	4. 高校生に「看護師になりたいが」と相談されたら勧める	.278 *
	下 5. 看護の仕事に誇りをもっている	.291 *
	位 6. もっと看護の勉強がしたい	.276 *
	項 7. 看護の道を選んだことに満足している	.353 **
	目 8. 看護師として仕事することに自信がある	.362 **
	9. もっと看護の技術を磨きたい	.090 *
	10. 私の子供が看護師になりたいといったら勧める	.294 **
	11. 看護の仕事は私の能力を生かせる	.340 **
	12. 看護に生きがいを感じている	.332
カ	職業的自己関与 (下位項目1.2.3.7.11.12)	.413 **
テ	職業への肯定的イメージ (下位項目4.10)	.283 *
ゴ	職業人としての自尊感情 (下位項目5.8)	.446 **
リ	職業人としての自己向上 (下位項目6.9)	.241
合 計		.405 **

*: $p < .05$ **: $p < .01$ (n = 65)

表3 入学時の自尊感情得点と卒業時の職業的アイデンティティの相関

		入学時自尊感情得点
卒業時 職業的 アイデンティティ	1. 将来看護師の仕事を長く続けたい	.081
	2. 看護師の仕事は私に適している	.254 *
	3. もう一度職業を選ぶとしたらまた看護の仕事を選ぶ	.158
	4. 高校生に「看護師になりたいが」と相談されたら勧める	.079
	下 5. 看護の仕事に誇りをもっている	.241
	位 6. もっと看護の勉強がしたい	.128
	項 7. 看護の道を選んだことに満足している	.367 **
	目 8. 看護師として仕事することに自信がある	.253 *
	9. もっと看護の技術を磨きたい	.041
	10. 私の子供が看護師になりたいといったら勧める	.205 *
	11. 看護の仕事は私の能力を生かせる	.285
	12. 看護に生きがいを感じている	.233
カ	職業的自己関与 (下位項目1.2.3.7.11.12)	.262 *
テ	職業への肯定的イメージ (下位項目4.10)	.134
ゴ	職業人としての自尊感情 (下位項目5.8)	.324 **
リ	職業人としての自己向上 (下位項目6.9)	.135
合 計		.247 *

*: $p < .05$ **: $p < .01$ (n = 65)

することに自信がある ($r = .253, p = .042$)「看護の仕事は私の能力を活かせる ($r = .285, p = .021$)」の4項目で有意差を認めた。

5. 考 察

1) 自尊感情得点の入学時と卒業時の変化について

本研究対象者の入学時自尊感情得点 28.94 ± 5.684 は、一般大学の女子学生(平均年齢18歳6ヶ月)を対象とした調査¹³⁾の自尊感情得点 31.68 ± 7.50 より低く、看護援助実習前の2年次看護学生を対象とした研究¹⁴⁾の自尊感情得点 28.93 ± 6.07 とほぼ等値であった。

Rosenbergが作成した自尊感情尺度は、評価的なフィードバックを与えても得点に変化しないとの報告¹⁵⁾がある。しかし、本研究対象者の入学時と卒業時における自尊感情得点を比較した結果、卒業時に有意に上昇していた。これは、歯科衛生士学生の自尊感情得点が臨地実習を通じて実習後に有意に高まったという江田¹⁶⁾の研究結果に類似している。この理由として、看護学生が臨地実習において能動的態度を求められ、医療者と協働するだけでなく患者や患者家族との援助的人間関係を構築しなければならないため、自己価値の感情が高められ併せて自尊感情得点が上昇した可能性が考えられる。さらに、アイデンティティの見直しを行ったものはより深い自己肯定感を獲得する¹⁷⁾といわれている。看護学生は入学以降、アイデンティティの揺らぎを何度も繰り返しながら職業的アイデンティティを形成することから、この揺らぎによって自身のアイデンティティの見直しが促され、結果として自尊感情が高められたと推察できる。これらのことから、教員は看護学生が在学中に感じるアイデンティティの揺らぎを自尊感情を高めるための有効な機会として生かし、看護学生が自分自身と向き合えるよう教育的な働きかけをすることが重要であると考えられる。

2) 職業的アイデンティティの入学時と卒業時の変化について

職業的アイデンティティの合計得点は入学時 43.71 ± 7.359 、卒業時 42.05 ± 7.532 と入学時の方が有意に高かった($p < .05$)。先行研究¹⁸⁾に比して、入学時がやや低値であるものの卒業時はほぼ等値であり、学年経過とともに低下する点において、先行研究と同様の結果であった。このように看護学生は、理想の自己に対し満足に看護が行えない自己に直面化するため、専門職としてのアイデンティティの形成が脅かされやすい。しかし、青年期に獲得されたアイデンティティは、

揺らぎと立て直しのプロセスを繰り返して形成されていく¹⁷⁾ことを考慮すると、本研究における卒業時の職業的アイデンティティの低下は、職業的アイデンティティの発達・成熟における重要で不可欠なプロセスであると解釈できる。そこで、卒業時には、入学以来の自分の専門職としての変化を自己評価する機会を設け、再び職業的アイデンティティの立て直しができるよう支援する必要性を示唆された。

3) 自尊感情と職業的アイデンティティの関連について

入学時および卒業時の自尊感情と職業的アイデンティティの間には弱い正の相関を認め、両者に若干の関係性が窺えた。すなわち、入学時に自分の能力や価値を高く評価できている学生の方が、自らが看護師になることや看護師として働くことに対する価値、信念を備えている可能性が高いことが示唆された。一方で、自尊感情が低い学生は、看護職としてのはっきりとした目的や方向性を見出しにくい状況であると推測でき、教員は、常に学生が自分の目的を明確に意識できるように促すなど、職業的アイデンティティ形成の機会を意図的に提供することが必要であるといえる。そして、看護学生が自分の目標を達成できた時には十分な承認を与え、看護学生自身が自己の専門職としての能力を高く評価して自尊感情と職業的アイデンティティが高められるよう支援することが重要であると考えられる。

また、自尊感情と職業的アイデンティティの4カテゴリーの関連をみると、入学時、卒業時ともに『職業的自己関与』『職業人としての自尊感情』の2カテゴリーで弱い有意な正の相関を認めた。これより、入学時、卒業時のいずれにおいても、自尊感情の高さは、看護師として仕事をするに対する自信を高めて職業にコミットメントした自分を感じさせ、「看護の仕事は私に適している」という感覚や「看護の道を選んだことに満足している」という気持ちに影響を及ぼしていることがわかる。言い換えれば、入学時に自尊感情が高い学生は、在学中に困難な学習や体験に対しても自信を持って臨み、達成感を得ることができると職業的アイデンティティの形成が促進される。しかし、自尊感情の低い学生は、「看護の仕事は私の能力を活かせる」と感じにくく、職業的アイデンティティの形成も阻害されるのである。このため、教員は、入学時の学生の自尊感情の高低に注目し、自尊感情が低い学生に対しては小さなことでも看護職として必要とされる経

験を多く積ませ、必要とされる自負から自分の価値を高く感じられるよう配慮することが重要であると考え

4) 一般化の可能性について

本研究では、研究の対象を一つの看護系短期大学の学生に限定し特徴を調査したものであり、一般化するためには限界があるが、看護学生の特性自尊感情の特徴と職業的アイデンティティとの関連を明らかにすることができた。近年、看護師養成校は専門学校、短大、大学など多岐にわたるため、本研究は看護学生全体の構造を掴むには幅が狭いといえ、今後はさらに対象を広げ検証していくことが課題である。

6. 結 論

看護学生の特性自尊感情と職業的アイデンティティの関連および経年的な変化を明らかにし、自尊感情に着目した職業的アイデンティティ形成のための教育支援方法について検討した。その結果、看護学生の自尊感情と職業的アイデンティティにはやや弱い正の相関を認め、両者に若干の関係性が窺えた。また、先行研究と同様、職業的アイデンティティ得点は経年的に有意に低下していた。一方、自尊感情は卒業時に有意に高くなっており、これは看護師養成校入学後、特に臨地実習におけるアイデンティティの揺らぎの経験が影響していると考えられた。そこで、職業的アイデンティティの形成を促すための支援として、(1)教員は看護学生が在学中に感じるアイデンティティの揺らぎが自尊感情を形成するための有効な機会であることを念頭におくこと、(2)看護学生が他者と自己、看護と自己との比較を通して自分の価値を感じられるように配慮することの重要性が示唆された。

7 謝 辞

本調査研究に当たり、ご協力くださいました学生の皆様に深く感謝いたします。

8. 文 献

- 1) 仲野好重, 桜本和也: 親子関係における期待と青年期のアイデンティティ形成の相互性について, 大手前大学社会文化学部論集 6: 111-126, 2005.
- 2) 春日秀朗, 宇都宮博: 親からの期待が大学生の自尊感情に与える影響—子どもの期待に対する反応様式に注目して—, 立命館人間科学研究 22: 45-55, 2011.
- 3) 波多野梗子, 小野寺杜紀: 看護学生および看護婦の職業的アイデンティティの変化, 日本看護研究学会雑誌 16(4): 21-28, 1993.
- 4) 濱野香苗: 4年生看護学生の自我同一性の経年的変化, 日本看護学教育学会誌 14: 100, 2004.
- 5) 土屋八千代: 看護短期大学生の職業同一性地位とストレス対処行動の経年的変化, 日本看護研究学会雑誌 26(3): 417, 2003.
- 6) 上山和子: 看護学生の職業的アイデンティティ形成と子育て観との関係性, 日本看護学会論文集 看護教育 39: 238-240, 2009.
- 7) 横田恵子, 劉瑞霜, 林稚佳子, 高間静子: 看護職者の自我同一性と個人の内的属性との関係, 富山医科薬科大学看護学会誌 5(1): 29-39, 2003.
- 8) 岡本祐子: アイデンティティ論からみた生涯発達とキャリア形成, 組織科学 33(2): 5, 1999.
- 9) グレグ美鈴: 看護における 1 重要概念としての看護婦の職業的アイデンティティ, Quality Nursing 6(10): 53, 2000.
- 10) 中島義明, 子安増生, 繁榊算男, 箱田裕司, 安藤清志, 坂野雄二, 立花政夫編: 心理学辞典, 東京: 有斐閣, p. 343, 1999.
- 11) Rosenberg M: Society and the adolescent self-image. Princeton, NJ: Princeton University Press.
- 12) 山本真理子, 松井 豊, 山成由紀子: 認知された自己の諸側面の構造, 教育心理学研究 30(1): 64-68, 1982.
- 13) 豊田弘司: 大学生の自尊感情と自己効力感に及ぼす随伴・非随伴経験の効果, 教育実践総合センター研究紀要 15: 7-10, 2006.
- 14) 山岸明子, 寺岡三左子, 吉武幸恵: 看護援助実習の受けとめ方と resilience (精神的回復力) 及び自尊心との関連, 医療看護研究 6(1): 1-10, 2010.
- 15) 小林知博: 成功・失敗後の直接・間接的自己高揚傾向, 社会心理学研究 20(1): 68-79, 2004.
- 16) 江田節子: 歯科衛生士としての職業的アイデンティティの形成とその教育に関する研究—臨床実習を通じて—, 日本歯科衛生学会雑誌 1(2): 41-51, 2007.
- 17) 前掲 8) 4-13.
- 18) 小藪智子, 黒田裕子, 合田友美, 新見明子: 看護学生の職業的アイデンティティ形成に関する研究 (第二報)—経年的変化から考える教育的支援—, 川崎医療短期大学紀要 27: 25-29, 2007.

